平成30年度　学校経営計画に対する最終評価報告書

重点目標		具体的取り組み	主担当	現　状	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）	備考
1　3年間を見通した進路指導体制を一層充実させ、生徒に高い志を持たせて、一人一人の進路実現を図る。	①	放課後補習を効果的に行い、大学入試に対応できる基礎学力定着と応用力養成を図る。	進路指導課 各教科 3年学年団	習熟別補習が定着して数年になり、形式は整ったと思われる。今後の課題は、大学入試に対応できる確かな学力をつけるための内容（教材等）のブラッシュアップである。	【満足度指標（生徒）】 放課後補習が効果的に作用している。	効果的に作用していると評価する生徒の割合が A　90%以上である。　B　85%以上である。 C　80%以上である。　(D)　80%未満である。	「役立っている」「どちらかと言えば役立っている」の割合が 74．9% （第2回学習実態調査）	昨年度より7.6ポイント数値が下落した。入学者の学力幅の拡大に伴い、学力や志望校に応じた習熟度別の補習体制を組んできたが、この数値の下落は、学力層の広がりに十分対応できなくなりつつあることを示していると思われる。今後は、習熟度の編成や教材選定にさらに工夫が必要である。	昨年度「役立っている」「どちらかといえば役立っている」の割合が 82.5% （第2回学習実態調査）
	②	「総合的な学習の時間」における大学・学部・学科研究等を通して、上級学校や職業について学び、高い志を持たせるように努め、生徒一人一人の進路実現に資する。	進路指導課 学年団 教務課	キャリア意識の定着と高揚を図り、学習意欲の向上につなげようとしている。このことと、実生活での柔軟な現実対応力（特にコミュニケーション能力）の養成とをリンクする方策を探ることが今後の課題である。	【満足度指標（生徒）】 副担任と担任が連携し、将来の進路目標を設定するための説明や指導が十分になされている。	進路を考える上で「総合的な学習の時間」が参考になったと思う生徒の割合が A　90%以上である。　B　80%以上である。 C　70%以上である。　(D)　70%未満である。	「参考になっている」「少し参考になっている」の割合が 1年　73．1% 2年　62．0% 平均　67．3% （同上）	1・2年とも昨年度より数値が微減した。現状の「総合的な学習の時間」が生徒の興味関心やニーズに必ずしも対応できていないことも窺われる。「総合的な探究の時間」への移行も迫っており、現在までの取り組みに適宜改良を加えて行く努力が必要である。	昨年度「参考になっている」「少し参考になっている」の割合が 1年74.8%　2年68.9% 平均71.9% （第2回学習実態調査）
	③	個人面談を通して生徒理解に努め、生徒個々に応じた進路指導を実践し、3年間を見通した進路指導体制の充実に資する。	進路指導課 学年団	寸暇を惜しんでの面談が十分に機能しているので生徒と教員との距離が近い。昨年度は3年次の数値が落ちたが、今年度は回復を期したい。	【満足度指標（生徒）】 担任との面談が自分の進路目標設定や進路実現に有効であると考えている。	進路を考える上で担任との面談が参考になったと思う生徒の割合が A　95%以上である。　B　90%以上である。 (C)　85%以上である。　D　85%未満である。	「担任との面談が参考になっている」「少し参考になっている」の割合が 1年　89．7% 2年　84．0% 3年　95．1% 平均　89．6% （同上）	1、2年で数値が昨年度より下落したが、3年では増えており、3学年の平均ではほぼ昨年並みとなっている。本校の特徴として広く認識されている「生徒と教員の距離感の良さ」を支えているのは担任が生徒に親身にアドバイスを行う面談である。今後とも、生徒が求める学習方法に対して、実践的、具体的かつ効果的なアドバイスを提供できるよう、進路指導課と学年団との連絡・意思疎通を密にしていきたい。	昨年度「担任との面談が役立っている」「もっと面談したい」の割合が 1年93.6%　2年93.3% 3年81.3%　平均89.3% （第2回学習実態調査）
	④	大学合格者数の数値目標を達成する。	進路指導課 3年学年団 教務課 各教科	本校における高学力層の受験対応力を伸ばし切れていない。中学力層の引き上げも不十分である。しっかりしたグルーピング指導の確立が喫緊の課題である。	【成果指標】 国公立大学合格者数	国公立大学合格者数が A　60人以上である。　(B)　50人以上である。 C　40人以上である。　D　40人未満である。	国公立大学合格者数は56名（現役52、過年度生4）であった。	大阪大学、北海道大学、名古屋大学、お茶の水女子大学など難関大学も含めて目標に近い結果を残すことができた。特進クラス初年度として一定の成果を挙げた。ただし、次年度以降は高校入学者層の学力幅の拡大に対応して、指導法を工夫する必要がある。	昨年度の国公立大学合格者：41名（現役39、過年度生2） ＊昨年度3年生は、前年度より1クラス減
					【成果指標】 金沢大学合格者数	金沢大学合格者数が A　15人以上である。　B　10人以上である。 C　5人以上である。　(D)　5人未満である。	金沢大学合格者数は4名（現役のみ）であった。	目標を大きく下回る、残念な結果であった。次年度以降は、金沢大学志望者のグルーピング指導を早期から実働化させる必要がある。	昨年度の金沢大学合格者数： 3名（現役のみ）
学校関係者評価委員会評価		生徒と教員の距離感の良さ等をアピールしてほしい。また、ハードとソフトの両面における充実に一層努め、大聖寺高校の魅力を発信してほしい。							
上記評価をうけた今後の改善策		生徒に寄り添う指導を一層進めるとともに大聖寺高校の日常的な良さも発信していきたい。ICT機器の整備など、学習環境の充実にも努めたい。							

重点目標		具体的取り組み	主担当	現　状	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）	備考
2　授業と家庭学習とにより学習内容の確実な定着を図るとともに、「主体的・対話的で深い学び」を実現するための研究と実践を進める。	①	中高交流研究授業、校内公開授業など諸研究授業の実践・参観及び研究協議会やICT活用研修会を通じて、教科指導法等の技能を高め、生徒の思考力の向上に努める。	教務課 各教科	昨年度は多くの授業で生徒が発展的な内容に触れ、より考える機会が得られたと答えたが、生徒が主体的にさらに深く学ぼうとしているかを問う項目として、継続して調査を行いたい。	【満足度指標(生徒)】 授業において自ら深く考える機会があり、学習に対する大きな刺激となっている。	授業において、自ら深く考える機会があり、学習に対する大きな刺激をが得られたという生徒の割合が A　80%以上である。　(B)　70%以上である。 C　60%以上である。　D　60%未満である。	国語　82%　地公75% 数学　82%　理科77% 保体　70%　英語82% 平均　78% （生徒による授業評価）	研究・公開授業の実施など各教科での努力もあり、比較的高い値が示されている。生徒の学力幅も年々大きくなっているため、授業での工夫と改善を今後も地道に続けたい。	昨年度 国語 82%　地公 77% 数学 79%　理科 76% 保体 83%　英語 85% 平均 80%
	②	家庭学習時間調査を通じて、生徒の学習状況を把握するとともに、学年団と連携して各種課題提出の徹底を図ることにより、家庭学習習慣の確立に努める。	教務課 各学年団 各教科	学年平均は、3学年とも目標の学習時間を達成しているが、達成している生徒の割合が低い。生徒一人ひとりへの声かけを欠かさず、重点的に取り組みたい。	【成果指標】 1日平均の家庭学習時間を1年生120分、2年生120分、3年生220分とする。	目標時間を達成している生徒の割合が A　70%以上である。　B　60%以上である。 (C)　50%以上である。　D　50%未満である。	1年　54% 2年　66% 3年　54% 平均　58% （学習時間調査）	家庭での学習時間の減少傾向が数年続いている。各教科からは具体的な指示を与えるような努力をしているが、生徒自らが必要性を感じ、一人ひとりが自主的に学習に取り組むことができるように、いろいろな働きかけが今後も必要である。	昨年度 1年　63% 2年　67% 3年　45% 平均　58%
				各教科の学習課題が生徒にとって有効にはたらき、一人ひとりが自ら考え取り組むことのできる内容となっているかを日々精査する必要がある。	【満足度指標（生徒）】 家庭での課題学習が効果的であると考えており、自ら積極的に取り組んでいる。	家庭での課題学習が効果的であると考えており、自ら積極的に取り組んでいる生徒の割合が (A)　70%以上である。　B　60%以上である。 C　50%以上である。　D　50%未満である。	1年　74% 2年　78% 平均　76% （第2回学習実態調査）	部活動休養日の設定など、昨年度より時間的な余裕が多くなったにもかかわらず、家庭での学習時間が確保できていない現状にある。与えられた課題だけで満足せずに、さらに次へ進もうと意欲を掻き立てるような内容を示す工夫が必要である。	新規
	③	土曜補習（Sゼミ）を効果的に実施し、学習における基礎基本の定着を図る。	教務課 各教科	土曜補習（Sゼミ）については、「やらされている感」をもつ生徒が多い。生徒の多様な進路目標を念頭に置いて、時間割等を検討する必要がある。	【満足度指標（生徒）】 土曜補習（Sゼミ）は学習意欲の喚起、基礎学力の養成に効果があると考えている。	効果があると考えている生徒の割合が A　80%以上である。　B　70%以上である。 C　60%以上である。　(D)　60%未満である。	1年　49% 2年　42% 平均　45% （第2回学習実態調査）	職員全体が土曜補習に対して、その内容を年度ごとに見直し、改善するように取り組んでいる。「役立っているか」→「効果的か」と質問を変更した関係もあるが、数値的に大きく落ち込んでいるため、各委員会、学年・教科会で継続し有効な手段を模索したい。	昨年度 1年　71% 2年　70% 平均　71%
学校関係者評価委員会評価		生徒の希望も考慮に入れて、生徒自身がやり甲斐を感じられる取組を増やしてほしい。							
上記評価をうけた今後の改善策		生徒の「学びに向かう力」の育成をめざして、授業、土曜補習、課題について見直しをかけるとともに、意欲の喚起につながる取組も導入していきたい。							

重点目標	具体的取り組み	主担当	現　状	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）	備考
3　文武両道を目指して部活動や生徒会活動の活性化を図るとともに、地域行事等への積極的参加にも努め、明るく活力ある学校づくりを推進する。	①　部活動の内容を充実させ、活性化を図り、文武両道を目指す。	生徒会 指導課	1年生は全員部活動に加入しているが、活動に満足している生徒は57%にとどまっている。時間が経つにつれて低下傾向にある。より満足度を高める工夫が必要である。	【成果指標】 1年生の部活動に対する満足度を高める。	満足している1年生の割合が A　70%以上である。　(B)　60%以上である。 C　50%以上である。　D　50%未満である。	「満足」、「どちらかといえば満足」の割合が 69．1% （第2回学習実態調査）	約7割の生徒が満足感を得ているが、部の削減や活動時間の制限等、部活動を取り巻く状況が大きく変化している。生徒がどのような活動を望んでいるのか考えながら活動のあり方を探らなくてはならない。	昨年度 「充実感を感じている。」 56.8% （第2回学習実態等調査）
	②　運動部の競技力向上を図る。	生徒会 指導課	弓道、体操、陸上競技、女子サッカーが好成績を収め、昨年度の県高校総体では総合順位が25位であった。	【成果指標】 県高校総体で総合順位20位以内をめざす。	県高校総体順位が A　20位以上である。　B　21位～25位である。 C　26位～30位である。　(D)　31位以下である。	総合35位 （男子40位　女子25位） （平成30年度石川県高等学校総合体育大会総合成績一覧表（中間2）））	順位としては厳しい結果となった。 保護者アンケートの中でも、要望として部活動の活性化が挙げられており、生徒数の減少や教員の働き方改革などの状況を踏まえつつ、対応策を考えていく必要がある。	平成27年度は28位。 平成28年度は33位。 平成29年度は25位。
	③　部活動が地域や中学校との連携を図り、地域に愛される学校づくりを目指す。	生徒会 指導課	多くの部活動が地域のボランティア活動や中学校との合同練習を行っているが、地域や中学校に活動が十分に認知されていないのが現状である。	【成果指標】 全28の部活動が年1回以上、地域や中学校と連携し、活動を行う。	地域や中学校と連携し、活動を行った部活動が A　25以上である。　(B)　20以上である。 C　15以上である。　D　15未満である。	「活動を行った」と回答した部数が　20 （部活動に関するアンケート）	昨年度より4部減った結果となった。 本校の現状を考えると、中学生や地域との連携は生徒募集の面から見ても重要と考える。積極的に交流を促すような働きかけを行いたい。	昨年度 24の部活動が地域または中学校と連携して活動した。
	④　郷土独自の歴史や文化を知り、郷土に対する親しみや誇りを持つよう、地域探訪を計画・実施する。	総務課 1年学年団	郷土の伝統文化に触れる機会が少ないために、それらに対する興味・関心が乏しい。	【満足度指標（生徒）】 設定されたコースを興味・関心をもって巡ることができる。	参加してよかったと感じる生徒が A　80%以上である。　B　70%以上である。 (C)　60%以上である。　D　60%未満である。	「よかった」68% 「ふつう」31% 「よくなかった」1% （地域探訪アンケート）	事前学習に対し、町歩きの時間が不足し、十分調べることができなかったことなどが考えられる。次年度の「総合的な探究の時間」では改善したい。	昨年度 「良かった」73%
				【満足度指標（生徒）】 郷土の歴史・文化について理解が深まり、郷土に愛着を感じる。	郷土に対する理解がかなり深まったとする生徒が A　60%以上である。　B　50%以上である。 (C)　40%以上である。　D　40%未満である。	「理解が深まった」44% 「理解がやや深まった 55% 「深まらなかった」1% （地域探訪アンケート）	町歩きの時間が不足したこと、ガイドの説明が難しかったことなどが考えられる。地域探訪の中で、地域の方々の地域を良くしたいという思いを強く感じたという生徒も多く、地域探訪発表会のプレゼンテーションは良い出来であった。	昨年度 「かなり深まった」48%
	⑤　山林ボランティアや地域清掃活動など、地域に貢献する取り組みに積極的に参加する。	総務課 学年団	学校全体としては、さまざまな取り組みを行っているが、主体的にボランティアに取り組もうとする生徒の割合は多いとは言えない。	【成果指標】 さまざまな地域ボランティア活動に積極的に参加する。	ボランティア活動に参加した生徒の中で「参加していきたい」と感じる生徒の割合が A　80%以上である。　B　70%以上である。 (C)　60%以上である。　D　60%未満である。	「今後も参加していきたい」と答えた割合が　60% （参加者アンケート） 10月の山林ボランティア参加数 27名	ボランティア部が廃部になり、参加する生徒数は減少したが、参加した生徒は草刈りや枝打ちを一生懸命行っていた。また、ご協力をいただいている加賀林業研究会の方々のお話も聞け、有意義な行事である。数少ないボランティア行事の1つなので、今後も継続していきたい。	6月9月の地域清掃ボランティアに2年学年が参加。 10月の山林ボランティア参加数 27名
学校関係者評価委員会評価	地域探訪やボランティア活動等、地域と密着した活動はいい機会なので、今後も充実させてほしい。加賀市の取組とリンクすると新しい発見があるのではないか。							
上記評価をうけた今後の改善策	今年度の「地域探訪」の成果と課題を活かして、来年度はより充実した取組にしたい。地域とのふれあいは生徒の成長を促すよい機会となるので、積極的に推進していきたい。							

重点目標	具体的取り組み	主担当	現　状	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）	備考
4　挨拶の励行や交通ルールの遵守などの指導を丁寧に行い、基本的生活習慣の確立と規範意識・マナー意識の高揚を図る。	①　登校指導や挨拶運動などを通して、挨拶の励行及び正しい制服の着こなしと規範意識、マナー意識の高揚を図る。	生活指導課 学年団	交通マナーやJR乗車マナー、服装容儀、挨拶において年々向上していると感じられるが、さらなる指導の必要性が感じられる。	【満足度指標（保護者）】 生徒の挨拶がしっかり行われていると感じている。	生徒の挨拶がしっかり行われていると感じている保護者が A　90%以上である。　(B)　70%以上である。 C　60%以上である。　D　60%未満である。	「生徒の挨拶がしっかり行われている」の割合が 75% （保護者アンケート）	「マナーや服装容儀、生活指導が適切になされている」という観点では85%であったのに対し、挨拶に関しては若干低い評価であった。登校時、生活委員や運動部活動による挨拶運動を行っているが、生徒の意識を高めるまでには至っていないと思われる。挨拶運動を継続しながら、集会等あらゆる場面で挨拶の大切さを指導していくことが必要だと思われる。	昨年度 「規範意識、マナー意識が向上したと感じる」69% （保護者アンケート）
	②　遅刻の管理をし、基本的生活習慣の確立をさらに推し進め、学習環境を充実させる。	生活指導課 学年団	昨年度は悪天候の影響もあり遅刻が増加した。基本的生活習慣を確立し、落ち着いた雰囲気で朝学習を始められるよう指導を徹底したい。	【成果指標】 1日の平均遅刻者数が1人以下になることを目指す。	全体の1日平均の遅刻者数が A　0．5人以下である。　B　1人以下である。 (C)　3人以下である。　D　3人を超える。	1日平均　1．56人 1学期1日平均　0．98人 2学期1日平均　1．97人 3学期1日平均　2．61人	昨年度に比べ遅刻者数は横ばい状態である。 1年78名，2年86名，3年96名であった。同じ生徒が遅刻を繰り返すことが多く、反省文を書かせるなどの指導をしているが改善しない生徒もいる。規律ある生活習慣を確立させるためにも、粘り強く指導していきたい。	平成26年度　0.7人 平成27年度　0.5人 平成28年度　1.1人 平成29年度　1.5人
	③　いじめのない学校づくりをめざし、共通理解に基づいて、全職員がいじめの早期発見・早期解決に向けて連携する。	生活指導課 学年団	日常の指導やいじめ防止のための講演会などの取組をすすめるとともに、アンケートや生徒との面談などを通じて情報収集と指導を図っている。	【努力指標】 課題のある生徒への対処で、学年団や教育相談、生徒指導などが十分に連携している。	連携しているとする教員の割合が A　80%以上である。　(B)　70%以上である。 C　60%以上である。　D　60%未満である。	「課題のある生徒への対処で、学年団や教育相談、生徒指導などが十分に連携している」の割合が 79% （教員アンケート）	特別指導やいじめの件数においては昨年度より減少したが、何らかの課題がある生徒は増えていると感じる。昨年度より若干連携しているとする割合が低くなっていることから、課題のある生徒に対して常に情報を共有できるよう学年会や保健室ともコミュニケーションを図り、連携の意識を高め生徒に対して最善の指導ができるよう努力していきたい。	昨年度 「課題のある生徒への対処で、学年団や教育相談、生徒指導等が十分に連携している」85% （教員アンケート）
学校関係者評価委員会評価	挨拶はしっかりできているし、交通違反もほとんどなく、生活指導上の問題はない。遅刻・欠席などについては保護者への働きかけも有効ではないか。							
上記評価をうけた今後の改善策	あたたかいコメントをいただいたが、交通マナーなど不十分な点も多々あるので、保護者にも協力をいただきながら指導に努めていきたい。							

重点目標	具体的取り組み	主担当	現状	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）	備考
5　校内の業務の精選・効率化に取り組み、時間外勤務時間の縮減に努める。	①　学校全体や担当する分掌において、業務の精選・効率化に取り組む。	全員	H29年度の時間外勤務時間は平均56.6時間で、全日制高等学校の県平均よりもやや多く、内、約3割を校務分掌等の業務が占める。	【成果指標】 業務の精選・効率化につながる取組を考え、実行する。	担当する分掌において、具体的な取組を考え、実行した教員の割合が A　100%である。　(B)　80%以上である。 C　60%以上である。　D　60%未満である。	「分掌で業務の精選や効率化の取組をしている」と回答した割合が 82．1% （教員アンケート）	個人で担当する業務に関しては、初年度ということもあり、アイデアを考え実行することが、比較的容易であったと考えられる。次年度以降、個人を越えた課全体での取組事項を考える必要がある。	新規
				【満足度指標】 学校全体の取組として、業務の精選・効率化が進んでいると感じられる。	学校として多忙化改善のための取組が進んでいると感じている教員の割合が A　100%である。　B　80%以上である。 C　60%以上である。　(D)　60%未満である。	「学校全体として多忙化改善の取組が進んでいると思う」と回答した割合が 41．0% （教員アンケート）	会議等の回数削減や時間短縮などは実行できた。 次年度は、効率化を更に追求するとともに、行事の見直しなど業務そのものの削減を図ることが必要である。	新規
	②　部活動運営において、時間を意識した効率的な指導を行う。	部活動顧問	H29年度の時間外勤務時間は平均56.6時間で、全日制高等学校の県平均よりもやや多く、内、約5割を部活動指導が占める。	【成果指標】 適切な部活動計画を立て、年間を通じて遂行する。	適切な計画を立て、かつ、おおむね実行できたと考える教員の割合が A　100%である。　B　80%以上である。 (C)　60%以上である。　D　60%未満である。	「部活動の運営において適切な計画を立て実行している」と回答した割合が 79．5% （教員アンケート）	7月時のアンケートでは「あてはまる、ややあてはまる」と回答した割合が82.1%だったが、12月時では3ポイント低下した。4月時点での計画を年間を通して実行することに、やや困難を感じた顧問が増えたためと考えられる。次年度は、今年度の実績を踏まえてより精度の高い計画を立て、実行可能にしていくことが必要である。	新規
学校関係者評価委員会評価	企業での時間外勤務時間の縮減の目的は、生産性の向上である。学校では何が目的なのかを明確にして進めていくとよいのではないか。							
上記評価をうけた今後の改善策	超過勤務による疲労の蓄積は教育の質の低下につながるという意識の共有をはかり、長期的な見通しのもとで、個人単位、課単位での実行策を検討していきたい。							